

日本語受身文の歴史
—除項ラレと加項ラレ—

林下淳一 (University of Otago) 後藤睦 (大阪大学) 金水敏 (大阪大学)

1. はじめに

- 現代日本語には動作主がニ格名詞句として現れるニ受身文と動作主がニヨッテ句として現れるニヨッテ受身文が存在する。しかし、金水 (1991, 1993) が指摘しているように、ニ受身文は昔から存在する一方、ニヨッテ受身文は 19 世紀後半まで確認されていない。

(1)

	19 世紀以前	19 世紀後半以後
ニ受身文	存在	存在
ニヨッテ受身文	不在	存在

- 一般的にニ受身文は主語が心理的受影者であるものが基本であると考えられている (山田 1908, Kuroda 1979)。つまり、ニ受身文の受身接辞ラレは動詞と Merge することにより心理的受影者の項を加える「加項ラレ」である。一方、Kuroda (1979) が論ずるようにニヨッテ受身は英語などの受身文と同様外項を減らす操作が関与していると考えられる。つまり、ニヨッテ受身の受身接辞ラレは「除項ラレ」である。

山田 (1908), Kuroda (1979) に従い、ニ受身文は常に加項ラレが関与していると考えれば、ニヨッテ受身文導入を除項ラレの導入と解釈しうる。

(2) 除項ラレ導入説：除項ラレは 19 世紀後半ニヨッテ受身文導入と同時に導入された。

	19 世紀以前	19 世紀後半以後
「加項」ラレ	存在	存在
「除項」ラレ	不在	存在

- 一方、Hayashishita & Takai (2016) は、現代日本語においてニ受身文の中に除項ラレが関与しているものがあると論じている。

Hayashishita & Takai (2016) の主張を受け入れれば、ニ受身文は歴史的に昔から存在するので、19 世紀のニヨッテ受身文導入は、動作主句としてのニヨッテ句の導入に過ぎず、除項ラレは昔から存在していたという仮説も排除できない。

(3) 除項ラレ 19 世紀以前存在説：除項ラレは昔から存在していた。

	19 世紀以前	19 世紀後半以後
「加項」ラレ	存在	存在
「除項」ラレ	存在	存在

本発表の目的：

除項ラレ 19 世紀以前存在説が妥当であると論ずる。

2. 除項ラレが関与しているニ受身文

2.1. ニ受身文の中にニヨッテ受身文と同様に振舞うものがある.

無生物名詞句

- 間接ニ受身文の受身主語は、常に心理的に何らかの影響を蒙る心理的受影者である.
- (4) ?*いつの頃からか、蛍の光が多くの人々に1番を歌われるようになった.
- しかし、直接ニ受身文の中には、ニヨッテ受身文同様、受身主語が心理的受影者でない場合がある.
- (5) a. (= Hayashishita & Takai 2016: Example [37b])
 いつの頃からか、蛍の光が多くの人々に歌われるようになった.
 b. 昨日の卒業式で、蛍の光が合唱団によって歌われた.

動詞の項構造

- 受身主語が心理的受影者ではないニ受身文は、対応する能動文において、基になる動詞がガ格名詞句とヲ格名詞句を項として取る場合にだけ可能である.
- (6) (= Hayashishita & Takai 2016: Example [43])
 a. ビルのやさしさがクラスみんなに愛されている.
 (N が N を愛している.)
 b. ?*ビルのやさしさがクラスみんなに甘えられている.
 (N が N に甘えている.)
- ニヨッテ受身文にも基になる動詞について同じ制限が働いている.
- (7) (= Hayashishita & Takai 2016: Example [46])
 a. 太郎が多く女性によって愛された.
 (N が N を愛する.)
 b. *太郎が多く女性によって惚れられた.
 (N が N に惚れる.)
- 一方、間接ニ受身文には上記のような制限はない.
- (8) a. ジョンは多くの友人に自分の妻に甘えられて、困っている.
 b. ジョンは支持者たちに敵対する候補者に投票された.
- ❖ これらの観察に基づくと、直接ニ受身文の中には、ニヨッテ受身文と同様に分析すべきものがあると考えられる.

2.2. ニヨッテ受身文と同様に振舞うニ受身文の動作主句は、ニヨッテ受身文の動作主句と同様、附加詞である.

ニヨッテ受身文の動作主句

- ニヨッテ受身文は、特定の出来事を表している文でなければならない.
- (9) (= Hayashishita & Takai 2016: Examples [62a, b])
 a. ダークマターの謎が日本の研究者によって解明された.
 b. ビルが作曲したバラードが母国の人によって演奏された.

(10) (= Hayashishita & Takai 2016: Examples [63a, b])

- a. ??ダークマターの謎が日本の研究者によって知られている.
- b. ??ビルが作曲したバラードが母国の人によって愛されている.

- この様な制限は動作主句を取り除くとなくなるので、この違いは受身文自体ではなく動作主句に起因すると考えられる.

(11) (=Hayashishita & Takai 2016: Examples [64a, b])

- a. ダークマターの謎が知られている.
- b. ビルが作曲したバラードが愛されている.

- ❖ 動作主句が項名詞句であるならば文全体が特定の出来事を表すのかどうかというような文脈に依存するようなことはない. よって、動作主句は付加詞と考えるべきである.

ニヨッテ受身文と同様に振舞うニ受身文の動作主句

- 受身主語が心理的受影者ではないニ受身文は、ニヨッテ受身文とは反対に、ある個体の属性を表す文、習慣を述べる文、状態性を述べる文、条件文の前件などのように特定の出来事をしていない文でなければならない.

(12) (= Hayashishita & Takai 2016: Examples [65a, c])

- a. この学会では、毎年受身の分析案が誰かに発表されるそう.
- b. もし盛大な晩餐会が時の権力者に催されたならば記録に残るだろう.

(13) (= Hayashishita & Takai 2016: Examples [66a, c])

- a. ?*今度の学会では新しい受身の分析案がジョンに発表されるそう.
- b. ?*昨日盛大な晩餐会が大統領に催された.

- この様な制限は動作主句を取り除くとなくなるので、この違いは受身文自体ではなく動作主句に起因すると考えられる.

(14) (= Hayashishita & Takai 2016: Examples [67a, c])

- a. 今度の学会では新しい受身の分析案が発表されるそう.
- b. 昨日盛大な晩餐会が催された.

- ❖ よって、ニヨッテ受身文と同様に振舞うニ受身文においても、動作主句は付加詞と考えるべきである.

- ❖ 以上の観察からニヨッテ受身文と同様に振舞うニ受身文は、ニヨッテ受身文と同じように基の動詞の外項を削除する「除項」ラレが関与していると結論づけられる.

3. 古代日本語における予測

- 除項ラレ導入説「除項ラレは 19 世紀後半ニヨッテ受身文導入と同時に導入された」を仮定すると(15)の予測が生まれる.

(15) 予測 A: 心理的受影者ではない無生物を主語とするニ受身文は確認できない.

- 一方、除項ラレ 19 世紀以前存在説「除項ラレは昔から存在していた」を仮定すると(16)が予測される.

(16) 予測 B：心理的受影者ではない無生物を主語とするニ受身文が確認できる。

- さらに、除項ラレが関与しているニ受身文は基になる動詞がガ格名詞句とヲ格名詞句をとるという現代日本語の制限が古代日本語にも当てはまるとすれば(17)の予測が成り立つ。

(17) 予測 B-1：無生物を主語とするニ受身文は、基になる動詞が現代日本語のガ格名詞句とヲ格名詞句に相当する名詞句を項として取っている。

なお、古代日本語の格体制は、下記の表に示すように、主語は主節の場合ゼロで、従属節の場合ゼロ・ガ・ノが出現し、目的語の場合はゼロ・ヲともに出現可能である（金水 2011）。また、古代日本語における格のありかたについて、現代日本語と同様に考えるべきかはさまざま検討すべき点が残されているが、本発表ではひとまず現代日本語と同様のものとする。

(18) 古代日本語の格体制

	主語	直接目的語	間接目的語
主節	ゼロ	ゼロ・ヲ	ニ
従属節	ゼロ・ガ・ノ	ゼロ・ヲ	ニ

(19) 現代日本語の格体制

	主語	直接目的語	間接目的語
主節	ゼロ・ガ	ゼロ・ヲ	ニ
従属節	ゼロ・ガ・ノ	ゼロ・ヲ	ニ

- 除項ラレが関与しているニ受身文の動作主句が与える現代日本語の制限が古代日本語にも当てはまるとすれば、(20a)の予測が成り立つ。そして、ニヨッテ受身文が 19 世紀後半に導入された理由は、除項ラレが関与する受身文で特定イベントを指すにあたりその動作主を明記するためであると考えられる。よって(20b)が予測される。

(20) a. 予測 B-2：無生物を主語とする受身文で特定イベントを指さない場合、動作主が明記されている時はニ格名詞句として現れている。

- b. 予測 B-3：無生物を主語とする受身文で特定イベントを指す場合、動作主は明記されていない。

4. 古代日本語における受身文

- 3 節で述べた予測の検証のため、上代語から中世語を中心として古代日本語における無生物主語の受身文の状況を調査した。調査資料は稿末に示す。(21)の尊敬と紛らわしい用例、(22)の潜在的受影者の用例は無生物主語の受身文として取り扱わない。

- (21) a. むかし、堀河のおほいまうちぎみと申す、いまそがりけり。四十の賀、九条の家にてせられける日、(……)（伊勢物語 97）
- b. 対・寝殿・渡殿は例のことなり、辰巳の方に三間四面の御堂たてられて、廻廊は皆、供僧の房にせられたり。（大鏡・天・太政大臣実頼）
- c. 年ごろありて、死なむとしける時、白河院に（絵ヲ）まゐらせたりければ、（白河院ハ）ことにそののち、贈官の宣旨下さるるとて、贈中納言といはれ給ひけるも、このゆゑにや。（十訓抄 4-16）
- d. さるほどに、其年は諒闇なりければ、御禊大嘗会もおこなはれず。（平家物語 1）

- (22) a. 割松のすきかげに、人のあまた乗りたればにやあらむ、牛苦しげにて、え上らねば、後の御車どもせかれて、とどまりがちなれば、雑色どもむつかる。（落窪物語 2）
 b. 除目の中の夜さし油するに、灯台の打敷を踏み立てるに、あたらしき油単に、襪はいとよくとらへられにけり。（枕草子 104）
 c. 萌黄・火威・赤威、いろ／＼の鎧のうきぬしづみぬゆられけるは、神なび山の紅葉ばの、嶺の嵐にさそはれて、龍田河の秋の暮、いせきにかゝ（ッ）てながれもやらぬにことならず。（平家物語 4）
- 古代日本語には、以下の(23)に示すように、心理的受影者ではない無生物を主語とするニ受身文が確認できる。つまり、予測 B が支持される。
- (23) a. その夜、南の風吹きて、浪いと高し。つとめて、その家の女の子どもいでて、浮き海松の浪に寄せられたるひろひて、家の内にもて来ぬ。（伊勢物語 87）
 b. 夕暮、暁にかは竹の風に吹かれたる、目さまして聞きたる。（枕草子 115）
 c. 内にも人の寝ぬけはひしるくて、いと忍びたれど、数珠の脇息にひき鳴らさる音ほの聞こえ、なつかしううちそよめく音なひあてはかなりと聞きたまひて、（源氏・若紫）
- (23)に示されるように、古代日本語の無生物主語の受身文は、基になる動詞が現代日本語のガ格名詞句とヲ格名詞句に相当する名詞句を項として取っている。このことは予測 B-1 に合致する。
 - また、(23)に示されるように、無生物を主語とする受身文であり、かつ、状態性（石垣 1955 の「形状性用言」）を表す場合、動作主が明記されている時は二格名詞句として現れている。このことは B-2 に合致する。ただし、古代日本語では、無生物主語の受身文の場合、ニで標示される名詞句が人間の動作主である例はなく、無生物（金水 1991 の「周縁的他動主」）である。金水（1991）が指摘するように、古代日本語では受身文の主語が無生物であるならば二格名詞句も無生物であり、その二格名詞句も動作主というより原因物を示すものである。
 - 無生物主語の受身文で特定イベント（石垣 1955 の「作用性用言」）を示す場合、中世語に 2 例確認されたが、その場合は以下に示すように動作主は明示されない。このことから、予測 B-3 も支持される。
- (24) a. 「（……）よき木も切られ、よく鳴かざる鴈も殺されぬ」（十訓抄 2-2）
 b. 野に火をはな（ッ）て既にやきころしたてまつらんとしけるに、尊はき給へる靈剣をぬいて草をなぎ給へば、はむけ一里がうちは草みなながれぬ。（平家 11）
- ❖ つまり、除項ラレ 19 世紀以前存在説「除項ラレは昔から存在していた」が妥当であり、19 世紀のニヨッテ受身文導入は、動作主句としてのニヨッテ句の導入であると考えられる。
 - なお、高見（1996）において、室町時代のニヨッテ受身文と見られる例が挙げられている。
- (25) 此寺は則此宗によりて建立せられけるにや、（神皇正統記、高見 1996 より引用）

ただし、(25)の用例は次の点で確例とはしにくいと考える。まず、「此宗」は典型的な有情物の動作主とは考えにくい。また、たとえ確例であったとしても、連続して他の文献において観察できず、孤例であるといえる。つまり、動作主マーカーとして、『神皇正統記』の段階でどれほど文法化していたか不明である（ニヨッテが動作主をマークしている例が組織的にあらわれるのは 19 世紀以降となっている）。ただし、除項ラレが近世以前にもあったということは証明されているので、この例がニヨッテ受身文かどうかにかかわらず、除項ラレの例であるということは認められる。

5. 結論

- ❖ 除項ラレは 19 世紀以前にも存在していた.
- ❖ 19 世紀後半のニヨッテ受身文の導入は、動作主句としてのニヨッテ句の導入である.

調査資料：

【上代語】万葉集 [7-8 世紀ころ]：新編日本古典文学全集
【中古語】古今和歌集 [905] / 竹取物語 [9 世紀前半～10 世紀前半] / 伊勢物語 [10 世紀前半～中頃か] / 大和物語 [10 世紀中頃] / 土佐日記 [955 頃] / 落窪物語 [10 世紀後半] / 堤中納言物語 [11 世紀半ば～12 世紀ころ] / 枕草子 [11 世紀前半] / 源氏物語 [11 世紀前半] / 大鏡 [11 世紀前半] / 更級日記 [11 世紀中～後半] / 讃岐典侍日記 [12 世紀前半]：上記すべて新編日本古典文学全集
【中世語】十訓抄 [13 世紀ころ]：新編日本古典文学全集本 / 平家物語 (覚一本) [13 世紀ころ]：日本古典文学大系 (旧大系) / エソポのハブラス [1593]：大塚光信, 来田隆編 (1999) 『エソポのハブラス：本文と総索引』清文堂出版

参考文献：

石垣謙二 (1955) 『助詞の歴史的研究』岩波書店.
Hayashishita, J.-R. & Iwao Takai (2016) "On Japanese passives," Unpublished manuscript, University of Otago & Kyushu University.
金水敏 (1991) 「受動文の歴史についての一考察」『国語学』164, pp.1-14.
—— (1993) 「受動文の固有・非固有性について」『近代語研究』9, pp.473-508.
—— (2011) 「第 3 章 統語論」金水敏・高山善行・衣畑智秀・岡崎友子『シリーズ日本語史 3 文法史』岩波書店, pp.77-166.
Kuroda, S.-Y. (1979) "On Japanese Passives," in Bedell et al. (eds.), *Explorations in Linguistics: Paper in Honor of Kazuko Inoue*, 305-347, Kenkyusya, Tokyo. (Reproduced as Kuroda, 1992: Chapter 5. (183-221))
高見亮子 (1996) 「室町時代受身文の動作主マーカー」『国文』85, お茶の水女子大学国語国文学会, pp.73-82.
山田孝雄 (1908) 『日本文法論』宝文館.